斗壱升八合」と見える中世以来の村で、か満のま村（蒲沼村）・「おしきり村」と接していた。正保4年（1647）『出羽一国絵図』に一日市村129石、蒲沼村380石とある。
その他の史料を分析すると、中世末期から近世初頭にかけてはこの3村のうち蒲沼村が最も大きく、一日市と押切は同じくらいである。押切村は一日市集落の西側に現在押切城跡がかすかに残っているように、集落の西部を占めていた。結局、一日市は、水陸交通の便からくる三斎市の開かれたところから地名が生じ、それが村名となった感がつよい。やがて宝暦元年（1751）に郡方役所がおかれ、十ヶ村を寄郷とする親郷を勤めるまでに成長して行く。

「歴史の道調査報告Ⅳ　北部羽州街道」
秋田県教育委員会

10.　ひといち

一日市は湖岸にあって、やはり市場の必要なところである。伝説にあるたった一日ではなく、月の一日か一のつく日かに市の立つ村という意味の地名で、市が地名となっている例は全国に多い。

（五城目町史）

11.　ひといち（八郎潟町）

一市とも書く。八郎潟残存湖東岸、馬場目川の下流右岸部に位置する。地名は三斎市開催の地によるという。

〔中世〕一市村

戦国期から見える村名。出羽国秋田郡のうち。天正19年正月17日豊臣秀吉が秋田実季の当知行地を安堵した朱印状写に、「大川村･一市村」311石余とあるのが初見（秋田家文書）。戦国期を通じ安東氏領で、実質支配は浦城主の三浦氏。湊合戦で三浦氏は没落。その遺子が実季に取り立てられ、当村に西接する押切城に入城。曹洞宗花嶽山清源寺は、三浦兵庫頭盛永の菩提所真言宗盛医山東谷寺を天正12年曹洞宗寺院に改組して当村に移建したという（町史）。　「慶長6年秋田家分限帳」では「湖東通一市村」81石余が栗沢弥五郎の代官所支配に指定（秋田家文書）。
湖東街道と河仁地方に抜ける五城目街道の起点であり、馬場目川河口部に位置し、地名の由来とみられている三斎市の開催という見方にもうなずけるものがある。

〔近世〕　一日市村

江戸期～明治22年の村名。秋田郡のうち。秋田藩領。元和4年3月6日向左近から人見宮内に宛てた「一市一向堂新開」の指紙写がある（払戸渡部家文責）。この間、慶長年間から続けられていた戸村堰が寛永3年に完成。この余水を受け新開が進む。寛永3年1月11日中川宮内が「大川之川向北中島新開」の指紙、同5年11月23日真崎季富が「ひと市村新開」の指紙をそれぞれ獲得している（払戸渡部家文書･真崎氏家譜）。「正保国絵図」「元禄7郡絵図」ともに129石の村と図示。慶長元年検地帳での一日市村戸数は19軒であったという（明和7年書上／畠山家文書）。しかし当村を縦断する羽州街道の整備に伴い、寛文2年当村は宿場・駅伝場に指定される。任務遂行のため、近隣の中島村を枝郷とし、押切・蒲沼などの村々からも人家移住を強行。享保年間の郡村改めで、両村を正式に当村枝郷とする。近隣の寄郷10か村を差配する親郷ともなる。馬場目川対岸の親郷大川村との間は渡し舟で往来。宝永2年「黒印高帳」で村高545石余・当高425石余であったが、2か村合併後の「享保黒印高帳」では村高1、070石余・当高892石余（うち本田371・本田並244・新田282）、「寛政村附帳」で当高877石余（うち蔵分461・給分416）と認定。「天保郷帳」は村高897石余。戸数は「享保郡邑記」で170軒（うち枝郷分37）、「秋田風土記」で200軒。草飼入会山は五十目村の五十目沢（五城目町史）。郡方役所が宝暦元年当村に設置、享和3年から五十目村に移ったが、天保9年再び当村に設置（町史）。村鎮守諏訪社のほか、神明社・八幡社・愛宕社をまつり（大正3年諏訪神社に合祀）、中世以来の曹洞宗清源寺（山内村松原神陀寺末寺）および修験如意山明楽院がある。潟漁関係史料にも当村名が頻出。幕末に三島家の私塾･畠山家の寺子屋などがある。明